

『道徳』のこれから

六年 M・W

少し前、「道徳の教科化」の話題をよく耳にする時期がありました。私の記憶では、小学生の頃に一週間に一回、「道徳」の授業があり、「心のノート」という教材を使用していました。その「心のノート」には、いじめはいけないということや命の大切さといった内容が質問形式で、私たち生徒自身に考えさせる形で書かれていたと記憶しています。その頃の通知表には、国語や算数といった他の教科とは異なり、「道徳」という評価欄はありませんでした。それは「道徳」が成績をつけるべき一般の教科ではなかったからだというのは、今回の感話を書くにあたって調べて初めて知ったことですが、小学生の私はそれを疑問に思うこともありませんでした。また、私にとって「道徳」の授業はとても退屈な時間で、学年が上がるにつれ、そんな「道徳」の授業に対して漠然とした違和感を持っていました。当時はその違和感の理由は分かりませんでしたが、赤の他人が設定した、本当に正しいのかどうか分からない「道徳」というものを押し付けられる気持ち悪さを、幼いながらに感じていたからだと今は思います。

道徳の教科化は、一九五八年に「道徳」という教科が創立されて以来、たびたび議論になりながらも見送られてきたそうです。そんな中で、現在本格的にその教科化が検討されている理由は何なのでしょう。その一番のきっかけは、二〇一一年に、三重県大津市の中学生がいじめられたことを理由に自殺した事件でした。この事件のあとに、「いじめ対策として道徳の教科化を」という安倍首相の提言を受けて有識者会議が発足しました。昨年十二月に行われたその会議において示された報告案では、「道徳を“特別の教科◆に格上げする。”「国の検定を受けた教科書を導入する。」「数値によって成績はつけないものの、記述式によって評価する。」という三点が求められ、その三点ともがほぼ了承されたそうです。

ここでいう「特別の教科」というのは、道徳専任の教員免許は設けないということで、これは本来の教科の条件を満たさないため、「特別の教科」という新たなカテゴリーを設けることになったそうです。また、国の検定を受けた教科書を導入する案に関しては、心の在り方を学ぶ「道徳」に文部科学省の検定が馴染むのか、そして、一つの教科書が採択されることで、様々な考え方を教え

られなくなるといったことが懸念されています。

そんな中で先日、私はメディアセンターで「なぜ人を殺してはいけないのか」という本が陳列されているのを見かけました。私は普段、本を手取ることは滅多にないのですが、その題名の強いインパクトがずっと頭から離れずに気になっていました。「人を殺してはいけない」というのは、家族や友人たちと生きていく中で自然と見についた考え方であり、小学校の道徳の授業で改めて教えられても、それに対して何の疑問も抱きませんでした。また、抱かないのが普通で健全なように感じます。

その本は、「自殺は許されない行為か」「他人に迷惑をかけなければ何をやっても良いのか」「死刑は廃止すべきか」など、「なぜ人を殺してはいけないのか」を含めた十題から構成されています。「なぜか」と問われたら答えには詰まるけれど、「自殺や人殺しはよくない」と多くの人が思っていると思います。また、自殺や死刑制度に関する問いは特に、事件が起こるたびに話し合われてはいるものの、はっきりとした結論に至っていません。もはや、人間が十人十色の思考回路を持つ限り、完全に解決することはないのだと思います。

本の題名にもなっている「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いについての筆者の見解をまとめると、「人間が憎しみや嫉妬、金銭欲、国家の命令や冷やかな好奇心を持つ限り、殺人は当たり前前の行為である。そして殺人には、正当な殺人と許されない殺人があり、その違いは、共同体のメンバーにとって共通利害に適うかどうかである。ここでいう共同体の共通利害に適う場合の一つは、戦争である。つまり、『人を殺してはならない』という倫理は、共同社会のメンバーが相互に共存を図るためにこそ必要なのだ。」となります。また、筆者はそれで十分だとも述べています。しかし、分かるようで分からず、読んでいくうちにどんどんよく分からなくなっていきました。なので、具体的に考えてみることにしました。例えば、「筆者の言う共同体を国とすると、そのメンバー、いわば国民の共通利益は平和で豊かな国作りにある。ここで、豊かな生活と自分たちの命をも脅かす敵国が現れた場合、自分たちの共通利益と命を守るために戦争をして敵国の兵士を殺すことは、正当な殺人である。」ということでしょうか。

私は、筆者の考え方には賛同できません。「人間が様々な感情や欲を持つ限り、殺人はあって当たり前だ。」ということは納得できますが、正当な殺人があるとする考え方は受け入れがたいものです。恵泉に入学してからは特に、原爆や東

京大空襲、ツチ族フツ族の争いといった話に触れる機会が多くあり、その中で理由は何であれ、人を殺してはいけないと考えるようになりました。そんな、私の中で絶対的にマイナスイメージである「殺人」という語と、絶対的にプラスイメージである「正当な」という語が組み合わせられていることに違和感を覚えます。

ここまで述べたように、小学校の「道徳」の授業では違和感を持っていたにも関わらず、恵泉での平和教育は自分の中にストンと落ちてきました。この差は何なのでしょう。一番の違いは、心に訴えかけてくる資料の有無だと思います。小学校の「道徳」の授業で使用していた「心のノート」には写真やイラストイメーはほとんどなく、字ばかりが並んでいました。それに対し、恵泉の平和教育は映像資料を毎回使用し、許される殺人はないということを分かりやすく提示してくれたのではないのでしょうか。これによって、正当な殺人はないという考えを持つようになったのだと思うのです。このように、「道徳」の授業に対する違和感は心の在り方を文字の羅列で教えられることにあったのだと思います。

現在進められている道徳の教科化も、特定の教科書を採択したり、筆記の課題を課したりといった決定事項の前に、然るべき映像資料などを使用して、より生徒たちに「道徳」の倫理が伝わるような工夫をすべきだと思います。また、昨年の有識者会議では、「道徳は数値によって成績はつけないものの、記述式によって評価する。」ということが了承されました。今まで恵泉の平和教育では、毎年感想を書いて提出しますが、それを評価されることはありません。もしあの感想文が成績をつけるための評価対象になったら、皆さんはどう思うのでしょうか。私はまず、なぜ評価し始めたのかと疑問に思うでしょう。それと同時に、自分が感じ、思ったことが成績になるという気持ち悪さも感じると思います。「道徳」の授業で筆記課題を課すとはそういうことです。

また、記述式評価を行うということは「道徳」について考える時間が長くなるということ、それは道徳に反した考え方を思いつく可能性が大きくなるということにもなりかねないのではないのでしょうか。「道徳」を教えられるたびに、それに反した考えを持ちたがる人はいると思うのです。これは十人十色といわれる人間の思考回路の恐ろしい側面だと思います。評価方法、授業の行い方のほかに、このような点でも道徳の教科化は慎重に審議する必要があると思います。